

中津川のむかしばなし

はだか

ぶひょう

絵と文

遠山 文枝

むかし、むかし、中山道
すじの「うぬま」という所
に「はだか武兵」と言う男
がいました。

若い頃から酒が大好きで
いつもぐうたらぐうたらよ
っていました。あまり飲ん
ではあばれて、らんぼうす
るので村の人にもきらわれ
とうとう家におれん様にな
ってしまいました。

それで東海道の雲助になっ
て、あばれん坊でくらし
ておりました。おまけにはだ
かでくらしおりました。



中津川の
むかし
のばなし

はだか武兵

それから何年かたって中山道の雲助をつづけながら、とうとう中津川の宿場へたどりつきました。

静かで平和なこの宿場が気に入ったのか茶屋坂というところに小屋を建てて住むようになりました。

これから武兵はえらい人気者になるのでございます。



武兵という男は生まれ
つきのすごい力持ちでの。
その上にどんな寒い日でも
はだかでえっちゅう一つ。
雲助仲間もおどろいたのなんの。
酒はめっぼう強くて、
力持ち、その上にすっぱだ
か、木曾街道の雲助仲間も
いちもくおいていた。
「はだかの兄き」といわれ
て評ばんやったそうな。



ある時、武兵は木曾へお客を乗せて行って一パイのんだら日がくれちまった。そこで仕方ないから木曾街道の須原^{すはら}という宿場でお宮の拝殿にとまったんや。その時とても不思議なことに武兵は出会ったとお。拝殿に白いひげのやせたじいさまがとまとっての。たいくつなもんで二人がいろんな話しとっての。そうしたら、じいさまの「おれは疫病神^{やくびょうがみ}やけんどう、ひとつおまえと兄弟分になろやないか」といったんやとの。



「兄弟分になってどうするんじゃ」と武兵がいうとの「おれがなあ、どんな家におってもおまえがきたらきつとにげていくことにするわ」といったもんでの武兵はこれはおもしろいじいさまやと兄弟分とやくそくしたんやっての。

あくる日、武兵はじいさまと二人で歩いて中津の宿しゆくに入ってふと気がついてみると白いひげのじいさまはおらんようになってしまつての。

武兵は

「ふしぎなこつた。ふしぎなこつた。」とみちみちブツブツとひとり言いいながら帰つて来たんやつての。



そんなことがあってから、しばらくたった或る日のこと、仲間の雲助がひどい熱病にかかったの。

それを聞いた武兵が白いひげのじいさまのことをふっと思い出して、ためしてみようかなと雲助の家へいったんだとの。

そうしたら次の朝、あんなに高かった熱がうそみたいにすっかりさがってしまったんやとの。

おどろいたわけや。

こんな不思議なことが二へんも三へんもあったもんやから、いつのまにか、はだかの武兵は熱病をなおすとえらいひょうばんになっての、遠いところからもたのみにくるようになったとお。



それから何年もたった或る冬の日、中山道の^{あおくて}大久手の宿でえらい大さわぎがおこつての。それはあるお殿様のおひめさまが江戸へいく途中で病気になるれての。それがまたひどい熱病で御うばさまもお女中も心配で心配でおろしちまったそうでの。ごきとうしてもらうやら、お百度ふんでもどうにもようならんかつての。熱にうなされたおひめさまを見守るだけやったそうや。



それで、おつきの家老は
困ってしまっの。

近所近べんのお医者さまも
「すまん、すまん、わしの
手にはおえん」といってさ
じをなげしてまっの。

おんばさまもおばばさまも
どうしてもおひめさまをな
おして上げたいとまた氏神
さまにお百度ふんでおが
んだけれどいっこうによ
うならんかっの。だんだん
重うなるばかりやっのとお。
六日目の朝になって宿場の
人夫がしら家老のところ
へやってきての。

「おしかりを受けるかも
知れませんが中津川の宿に

えき病をなおすはだか武兵という雲助がおります。身分はいやしいものですがえらいひょうばんもんです。このものをお召しになってはいかがなもんで」とおそろおそろ申し上げたそうな。

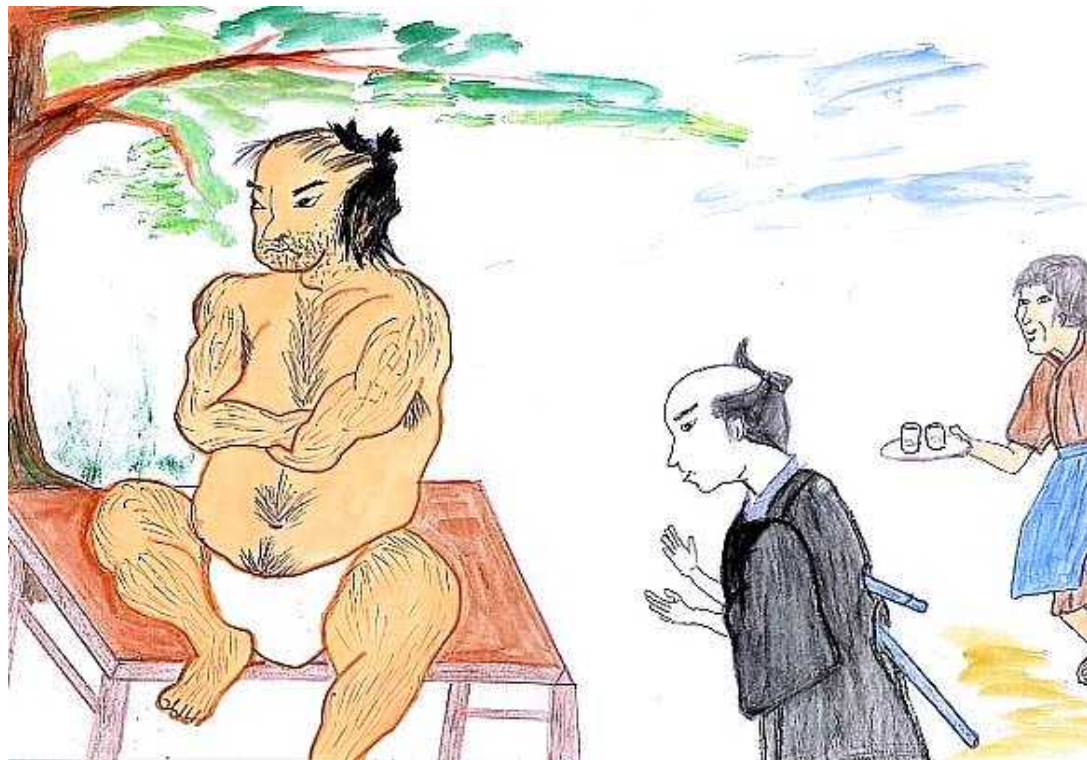


家老はおひめさまの病気は悪うなるばかりで大勢のお医者さまにもみはなされ、ごまをたいてのごきとうもなんのききめもなくでの。

困りきっておられたそうな。もうこうなったら身分のことなどいっておれんと、早速家来にいったとの。

「よし、はようそれをよべ」すぐさま家来と人夫がしが中津川宿のはだか武兵のところへとんでいったとか。その日は寒い日でひとりものの武兵は薄ぐらい小屋の中で夕飯でもと思っった。

人夫がしが大声で「はだか武兵とはおまえか。大久手の宿でおひめさまが大変な熱病でおくるしみだ。はよう来てくれ。」とたのんだが武兵はだまっていっこう出かけようとはせんのか。黙ってめし食っった。いらいらした家来は刀をぬいて「おい、武兵おれたちのたのみがきけんのか」とおどかしたそうや。武兵は知らんかおして黙っておったとお。おどいてもあかんかった。しかたがないから人夫がしが近くに住んでいるおとくばあさんとこへたのみにいったら「なあに、むりやりつれていきんされ」といったんや。それで家来と人夫がしらはむりやりにかごにおしこんでとんで帰ったやと。



大久手に着いた武兵を見て家老や家来はあっとおどろいての。

雪降りの寒い日に、えっ中一つのまっばだかでの。

黒光りする体はきん肉がもりもりともり上がって、とてもつよくたくましくみえての。

家老も武兵のはだかにびっくりした。でも大じなおひめさまの病気の方が心配でさっそくおへやへ案内したとお。

武兵がおひめさまのへやへ入ってから、しばらくたつと一番どりが鳴いた。

それでもおひめさまのへやからはなんにも聞こえんのや。しいんとしとる。

家老は困った。困っちまった。

おひめさまのへやへ雲助ひとり、それもはだかの武兵を入れたんだから。

ふすまの前をいったり来たり心配で心配でたまらんかったんやの。うろうろ、うろうろ。



家老もおうばさまも家来衆もどうなることかとじっと耳をすましておいでた。その時にの、へやの中るかすかに「うーん」というおひめさまのうめき声が聞こえたんや。

「これは一大事」とばかりに家老がサッと戸をあけた。あけてみてびっくりこいた。おひめさまがにこっと笑った。

おひめさまの病気はすっかりよくなっとったとお。家老は腰がぬけるほどびっくりした。

やくそく通り、えき病神のじいさまが武兵をみておどろいてにげていっちゃった。



家老はよろこんだのなんのおおよろこび。

「武兵、おてがらじゃ。おてがらじゃ。ほうびはのぞみ通りにあたえるぞ。何がええ。たんといえ。なんでもいいぞ。」といったけど、武兵は「わしはごらんの通りのはだか武兵です。何にもいりません」といっただけでブスッとだまってさっさと中津川の宿に帰ってしまったと。

なんにももらわなんだ武兵にみんなおどろいたそう。そのあくる日の十二月一日、その日はめずらしく晴れて春のようなぬくい日での。

おひめさまの行列は十日ぶりで大久手の宿を江戸へとこやかにおたちになったとお。



それからは大変じゃった。
「はだか武兵の兄さがおひ
めさまの病気を一晩でなお
したぞな」
近所かいわいで大ひょうば
んになったそうな。
それからはどこやらのじじ
さまがやんでおいでだ。
となりのあねさが病気だと
ひっぱりだこになったとお。
おかげでえき病神は入った
らにげし大いそがし、
ますますやせてますます細
うなったそうな。



一そうどうも二そうどうもあっても中山道はかわりなし。
おじぞうさまはいつも黙って旅人を見送った。
かごやがとんだ。
ひきゃくが走った。
中山道はずっとずっといつまでもつづく。
そして今はおかごの行れつはないけどくるまの行れつは今もつづいています。



それからのほかか武兵は亡くなってからも村の人たちからうやまわれて、おやしろをつくってまつられたんだとお。のんだくれの武兵は人だすけの神さまになったんだとお。

今でも中津川の旭が丘園にまつられているの。

石ひの前に船形の石がおいであるんじゃ。この石をたたくと、チンチンと金のような音がするもんで。昔からチンチン石といっとるけどな。

悪い病がはやる時にゃ、おまいりして自分の年のかずだけチンチンと石をたたくと病気にかからんといっつの、今でもおまいりするんじゃとか。

武兵はえらい人やったんや。

ハイ、ありがとうございました。

みなさんも一度おまいりしてみてください。私もそのうちおまいりしてみたいです。

